会長就任にあたって

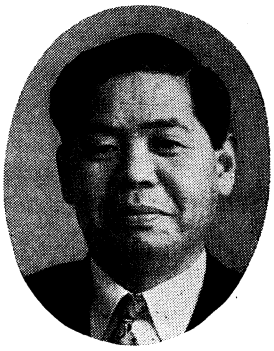
山　本　三　郎

私はこのたびはからずも，皆様のご推挙により，土木学会会長に就任いたしました。私ごとき者が果たしてよく重責に耐えられるかどうかはなはだ心もとない次第でありますが，全力をあげて会の発展のために努力いたす所存でありますので，役員の皆様はもちろん，会員各位の絶大なご援助をお願いいたします。

土木学会は創設されて以来長い歴史をもっており，来年は満 50 年を迎えんとしております。この間，先輩，同僚各位のご尽力によって，斯界に多大の貢献をしてまいりました。現在地方に設けられている支部は6つ，本部にある常置委員会の数は 30 有余におよんでおりますが，これら委員会に関係される方々や，各支部の役員各位には献身的なご努力を願っており，土木学会誌，土木学会論文集をはじめ，各種刊行物にその成果は見られるのであります。

最近におきましては，吉田賞の創設，土木学会定款の改正，特別員，賛助員の増員などの面において歴代会長を始め，役職員の努力が着々と実っており，学会の基盤はいよいよ堅まってまいったと申すことができます。

土木技術は，他の方面の技術に比して，進歩がおそいといわれております。しかれども最近は新施工技術，新施工機械の導入，新材料，新設計の考案，試験実験設備の完備などによって，戦前には全く見られなかった大土木工事が各方面に展開され，実績は実績を生み，土木技術はめざましい進展を見ているのであります。



われわれ土木技術者の使命は時代の要請に応じて，不可能のことを順次可能にするとともにつよく，安く，早く物を建設することにあることは申すまでもありません。

われわれの推計によりますと，38 年度のわが国土木工事の規模は，全体で1兆 7000 億円に達するものと思われます。わが国経済拡充の基盤を築くものは，公共，公益投資であり，その責務を果たすものはわれわれ土木技術者であります。会員各位のご勉強，ご活躍が，今日ほど待望されているときはありません。

学会はこの際，会員全員の親しみやすい学会となり，これを舞台として，会員相互の親善がはかられ，切瑳琢磨の飛躍台となることを目標としなければならないと考えるものであります。

光輝ある重責をになうにあたり，重ねて役員各位はもちろんのこと，会員の皆様のご援助をお願いいたしましてご挨拶といたします。

1963.6.10・記